Ⅲ　大極殿跡の調査（第113次調査）

この調査は、俗に「大黒の芝」と称され、平城宮大極殿跡とされている土壇を中心に2,100㎡についておこなった。調査地は宮南面東門（壬生門）の北方約580mにある。この土壇は昭和30年に実施された平城宮第1次調査によって、桁行柱間寸法13尺の複廊で囲まれていることが明らかにされている。また、地形の状態から南面回廊の中央には大極殿閤門、北面回廊中央には後殿の存在が推定されている。土壇は東西49m、南北26mの長方形で、南に緩やかに傾斜する周囲の現地表からの比高は南側2.3m、北側1.5mであった。調査は昭和53年10月1日に開始し、昭和54年2月7日に終了した。

検出した奈良時代の遺構は上層と下層遺構にわかれる。上層遺構には基壇建物SB9150（第二次大極殿）と、それに関連する足場SX9146・9147・9148・9149、石敷SX9145－A・Bなどがあり、下層遺構には掘立柱建物SB9140・9141、及び柱穴列SA9142がある。奈良時代前の遺構には前方後円墳（神明野古墳）SX0249があり、平安時代の遺構には9世紀の掘立柱建物SB9152、10世紀の土壙SK9153がある。

大極殿

SB9150は基壇上に建つ桁行9間、梁行4間の四面庇付東西棟の礎石建物で、柱間寸法は身舎15尺等間、庇の出12尺、基壇の出13尺である。基壇の残存状態は良好で、礎石は残存しないが、その据付位置を全て確認することができた。

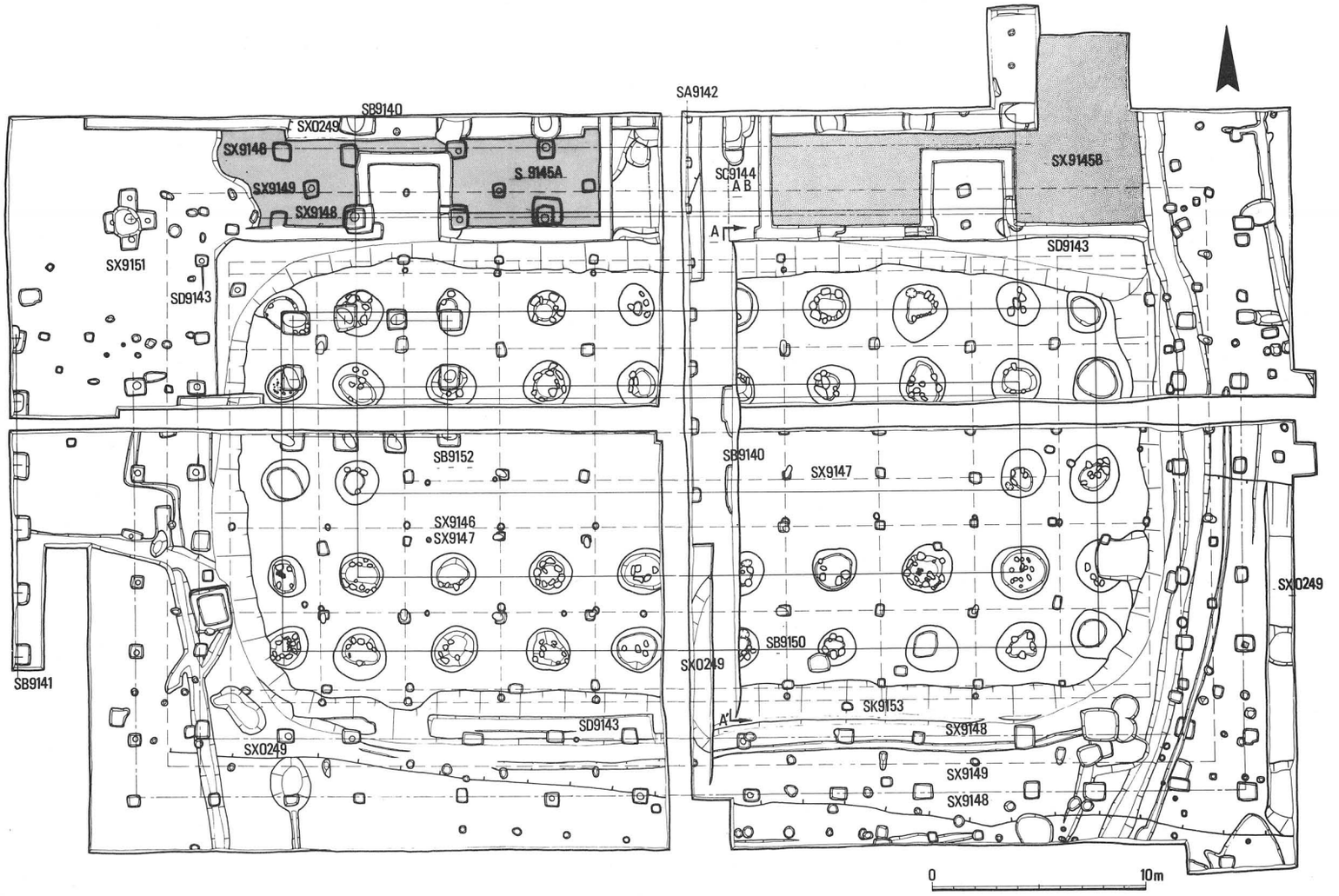
軒廊・階段　地覆石抜取痕跡の状況により、基壇北面の中央間から東西それぞれ3間目の位置に幅4.45m（15尺）、出3.55m（12尺）の階段が取り付き、北面中央には後殿に接続する東西幅8.15m（27.5尺）の軒廊SC9144を検出した。軒廊基壇には大極殿基壇北端から北約3.3m（11尺）に、梁行柱間寸法4.5m（15尺）の一対の礎石抜取痕跡がある。この軒廊には基壇幅3.8mの前身軒廊SC9144－Aがある。基壇南面では中央間と北面階段と対応する位置に、階段裏込めの積土を残しているが、東階段はほとんど削平されている。東・西面の階段については、

後世の削平を受けて痕跡を残さないけれども後述する建築工事足場ＳＸ9148の柱間寸法が階段部分に限って広くなっている状況から判断して、それぞれ南から2間目の位置に階段を設けていたと考えられる。

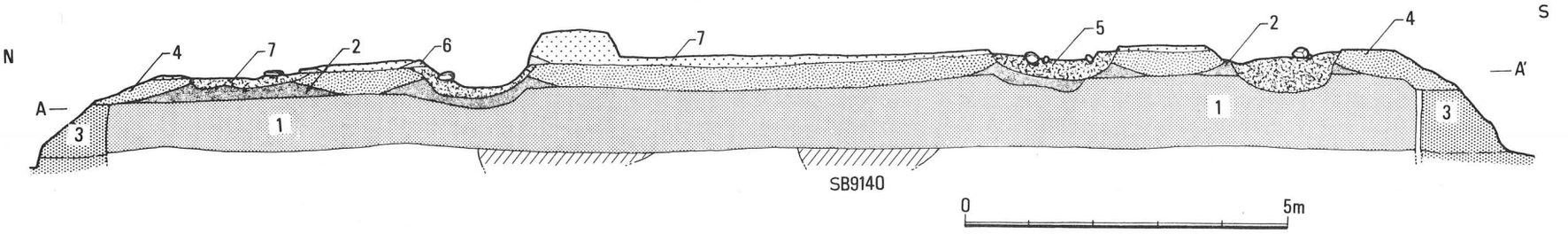
地覆石　北面東階段の西入隅部分には、基壇化粧の凝灰岩製地覆石が東西方向に2個相接して原位置に残存していた。2個とも遺存状態は良好である。西側の地覆石は幅45.0㎝、長さ56.4㎝、高さ32.0㎝、外端から内側28.9㎝の位置に幅10.6㎝、深さ6.8㎝の溝を穿ち羽目石を受ける仕口としている。また、上面には、外端から19.5㎝の位置に羽目石前面の当たり痕跡が認められる。見付上方には幅3.8㎝、高さ6.0㎝の段が切り欠かれている。東側の地覆石は北面東階に接する位置にある。幅45.0㎝、長さ79.9㎝、高さ30.0㎝で、上面の西半部分には外端から内側18.4㎝の位置に見込幅23.2㎝、見付幅38.7㎝、深さ7.2㎝の束石を受ける枘穴がある。枘穴の外端から7.0㎝のところに枘穴と同幅の束石の当たりがある。上面東半部分には外端から27.6㎝の位置に幅13.3㎝、長さ41.2㎝、深さ7.8㎝の羽目石を受ける溝状仕口があり、西端から49.6㎝には階段の羽目石を受ける幅14.4㎝、長さ14.0㎝、深さ4.8㎝の南北方向の溝状仕口が穿たれている。見付上方には幅3.0㎝、高さ5.0㎝の段を切り欠いているが、風蝕によって著しく磨耗している。

石敷　基壇周囲には前後二時期にわたって石敷を敷設している。基壇北側東半部では小石敷ＳＸ9145－Ｂを検出した。直径5～15㎝の礫を敷き詰め、直上には大極殿を解体した際に廃棄された瓦片、凝灰岩切石片が多量に堆積していた。

小石敷の下層には厚さ10㎝程の砂質土層を挟んで砂利敷ＳＸ9145－Ａがある。基壇北側西半部では上層の小石敷は後世の削平を受けて、下層の砂利敷のみ残存していた。これは直径1㎝前後の小礫を5～10㎝厚に敷き詰めたもので、その下に凝灰岩の細紛を多く混じえた厚さ5～10㎝の砂質土層がある。下層砂利敷面から地覆石上面までの見付高さが20㎝であるのに対し、上層石敷面は地覆石上面とほぼ同じ高さであり、上層石敷はのちに嵩上げされたことは明らかである。なお基壇東・西・南側では後世の削平により石敷は残っていない。



第4図　第113次調査遺構図



第5図　SD9150基壇断面図

基壇の築成　基壇中央を南北に断ち割った結果、以下のような基壇築成工程を明らかにすることができた（第５図）。

(1)　基壇版築を南北 20.5 m、東西約 41.9 m の範囲について築成する。下層整地面は南に緩やかに傾斜するために高さは北で75cm、南で 120 cm を測る。版築層は２～10cm の厚さで15～16層積み上げている。積土には下半部に小礫を多く含む暗褐色粘質土を多用して、上半部には明黄褐色粘質土を用いている。

(2)　土壇①の上面の礫石据付位置に、基底部での直径 2.7 ～ 3.2 m、高さ 0.50～0.55 m の円丘形の盛土を行う。この部分には土壇①の上半部と同質の明黄褐色粘質土を用いているが、より固く締っている。円丘の基底部に厚さ２～５cm の固く締った層を凸レンズ状に２～３層積上げた後、厚く粘質土を盛るもの（北側柱位置）と、土壇①の上面を30cm 程椀底状に掘り下げてから粘質土を埋めて円丘を形成するもの（入側柱位置）とがある。この相違は礎石抜取痕跡から推測される礎石の厚さに対応しており、礎石据付のための仕事の差をあらわしている。

(3)　土壇①の四周を全面的に30cm 程地下げを行い、基壇を拡幅する。その幅は南側 1.25 ～ 1.40 m、北側 1.05 m、西側 1.42 m で東側は未確認である。この部分の版築層は厚さ３～20cm の粘土あるいは砂質土で、小礫や凝灰岩細片を多く含み、極めて固く締っている。南側では①と③の間には縦方向に幅９cm の非常に脆い土層が認められるが、性格については不明である。なお軒廊の前身基壇ＳＣ9144 －Ａはこの拡幅と一体となって築成され、厚さ５～10cm の固く締った層を積上げている。いっぽう、軒廊基壇拡幅部分の積土には凝灰岩片や瓦片が混入しており土質も柔らかい。

(4)　土壇①の上面に足場ＳＸ9146 を組む。そののちに、土壇①、③および円丘形盛土②の上全面にわたって版築を重ねる。版築層は５～６層あり、全体で35～38cm の厚さである。小礫を多く含み全般的に固く締っている。

(5)　最上層には厚さ５cm 前後の暗黄白色砂質土を全面に均一に敷き詰め、この段階で礎石据付の掘形を掘削する。掘形は④の積土と②の円丘形盛土部分を椀底状に掘りくぼめており、その深さは礎石の厚さに対応していると考えられる。掘

形内には固く締った黄灰色の粘質土と礎石の根固め石があり、根固め石には直径20～80㎝の河原石が使用される。また礎石据付痕の底面に直径5㎝前後の小石を敷いている箇所もある。

(6) 礎石を設置した後、礎石の周囲に淡黄褐色粘土の根巻土を盛り上げ礎石の安定をはかる。

(7) 更に全面にわたって版築による積み上げを行い、土壇部分の築成を完了する。なお残存していた基壇の高さは地覆石上面から1.3～1.5ｍである。

(8) 階段裏込の積土を行う。厚さ7～20㎝の版築層であるが基壇本体よりも粗雑である。

足場　大極殿の造営・解体に伴う4種類の足場柱穴を検出した（第6図）。

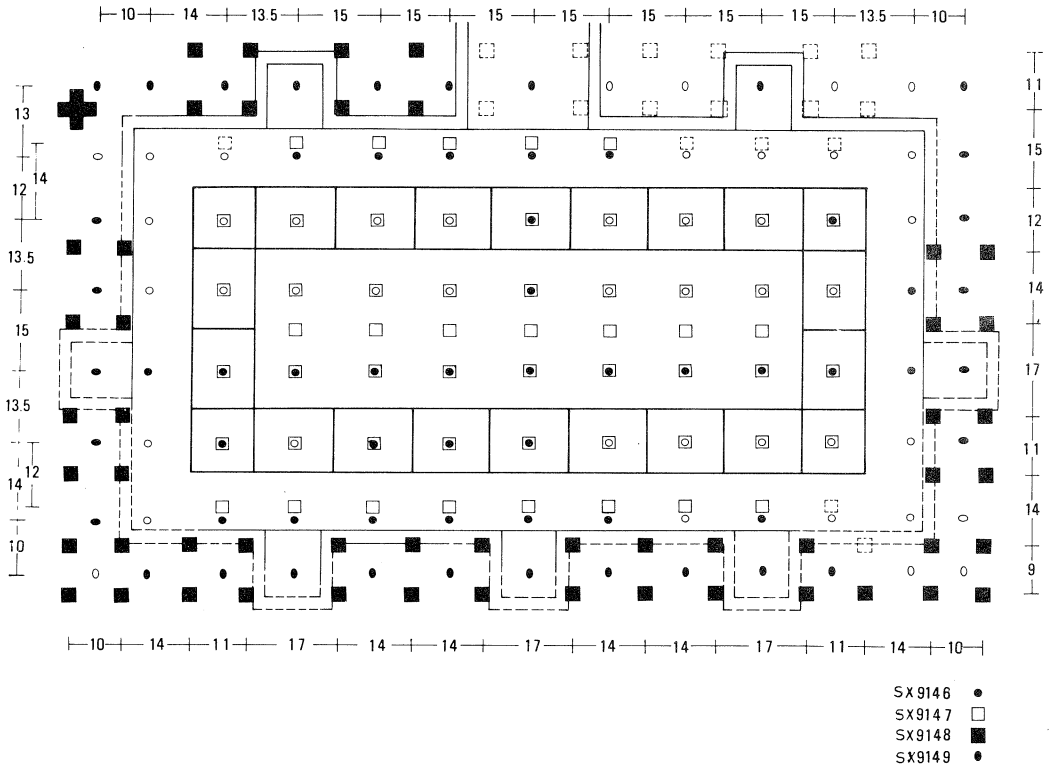
ＳＸ9146はＳＢ9150の造営に伴う基壇上の足場である。柱位置はＳＢ9150の各柱間中央通りにある。柱穴は直径25～30㎝の円形を呈し、柱掘形をもたない。

ＳＸ9147はＳＢ9150の解体に伴う基壇上の足場である。柱位置はＳＸ9146と同様ＳＢ9150の柱間中央通りにあるが、身舎の内側部分の棟通りにも配される。柱掘形は一辺40～60㎝の方形で柱抜取痕跡がみとめられ、埋土中には凝灰岩切石片や瓦片が混入している。ＳＸ9146・9147はほぼ同位置に柱穴が重複しているが、基壇上の南辺と北辺ではＳＸ9146はＳＸ9147より南に2尺ずれている。また基壇東辺と西辺にＳＸ9147の柱穴はみとめられない。

ＳＸ9148はＳＢ9150の造営に伴う足場で、基壇の四周を二重に囲むように柱を配している。内側の柱列とＳＢ9150の側柱までの間隔は北側で15尺、南・東・西側で14尺である。また梁行柱間寸法は北側で11尺、南・東・西側で10尺である。梁行の柱筋はＳＢ9150の柱筋とほぼ一致するが、北面、南面の階段部分では桁行柱間寸法が17尺と広い。東面、西面についてもＳＢ9150の南から2間目の柱間位置の足場柱穴の柱間寸法が17尺であり、すでに触れたように、この位置に階段を設けていたと考えられる。この足場柱穴は一辺60～90㎝の方形掘形をもち、直径20～30㎝の柱痕跡が残るが、ごく浅い。北西隅の4間分の柱穴がなく、北東隅部分も削平されてはいるが、はじめから足場を設けなかったものと推定される。

ＳＸ9151は基壇北西角から西に約3.0ｍの位置にあり、十字形の掘形をもつ。中央に直径55㎝の柱抜取痕跡があり、四方に直径25㎝前後の柱痕跡がみとめられる。５本の柱は埋土の状態からみて同時に設置されたものと考えられる。中央柱は足場ＳＸ9148と柱筋を揃え、ＳＸ9148と密接な関連をもっていたと思われるがその実際の機能については不明である。

ＳＸ9149はＳＢ9150の造営に伴う足場で、基壇四周を廻る。柱位置はＳＢ9150の各柱間中央通りで、基壇端から約1.5ｍ離れている。柱穴は基壇北側では一辺60～70㎝の方形掘形で、他は円形あるいは楕円形である。この足場は基壇上の足場ＳＸ9146から北側で13尺、南・東・西側で10尺離れた位置にあり、両者は一体であったと考えられる。基壇周囲の足場ＳＸ9148・9149の柱穴は共に砂利敷ＳＸ9145－Ａの下の凝灰岩細粉を混入した砂質土層の下層面において検出した。



第６図　SB9150足場配置模式図

下層遺構

下層遺構は神明野古墳の削平をおこなった平城宮造営創建期の盛土整地面上で検出した。古墳周濠の埋土整地層の厚さは場所によって異なり、堆積土を丁寧にさらえた部分では50㎝前後であり、さらえ残した部分では10㎝と薄い。削平面を含めて30～40㎝厚の盛土をおこなっており、基壇直下部分では整地最上層に小礫層が部分的に認められる。

ＳＢ9140は桁行７間、梁行４間、15尺等間の東西棟建物である。平面形式は四面庇と推定され、北庇部分は基壇の北側で検出し、南庇は基壇中央の南北断ち割り箇所において確認した。東・西庇については中央棟通りが基壇直下にあるため確認していない。南北方向の中軸線は礎石建物ＳＢ9150と同一で、梁行の柱筋も一致しているが、建物位置はやや北にあり、ＳＢ9140の南面柱列はＳＢ9150の中央南寄りの位置にある。柱掘形は一辺130～170㎝で、柱抜取痕跡から直径60㎝程の柱を用いていたと推測される。

ＳＢ9141は調査区の西端で検出した５間以上、10尺等間の南北方向の掘立柱列で、ＳＢ9140の西側柱筋から西に16.2ｍの位置にある。南北棟建物である可能性が強い。この近辺は後世の削平を受け地山面が露出しているため、整地層との関係は不明であるが、下層遺構としておく。

ＳＡ9142は基壇中央の断ち割り部分において検出した南北方向の柱穴列で、ＳＢ9140の中軸線上にある。７間分を検出し、更に北に延びる可能性もある。柱間寸法は南から10・10・９・７・８・８・７尺と不揃いである。南端の柱位置はＳＢ9140の南側柱筋とほぼ一致するが、他はＳＢ9140との関連は認められない。

神明野古墳

神明野古墳ＳＸ0249についてはすでに、平城宮跡第３・６・12・73次調査でほぼその概形が明らかになっており、今回の調査では前方部の西南隅を確認した。大極殿基壇南側では前方部周濠外縁、東側では前方部前縁、西側では周濠の西側の外縁を検出し、軒廊下の断ち割り箇所では前方部西側縁を検出した。調査区東端で周濠部分を掘り下げたところ最深部でも50㎝と浅く、葺石などの施設はみら

れない。周濠の堆積土は底面に10～15㎝の厚さで残っており、基壇中央の断ち割り箇所では厚さ80～100㎝の礫混り青灰粘土及び黒色腐植粘質土である。

今回の調査の成果と従来の知見とを考え合わせると、神明野古墳は後円部径64m、前方部幅68m、前方部前長30m、前方部後長21m、墳丘全長115m前後の墳丘規模に復原することができる。

平安時代の遺構

SB9152は基壇上北西隅にあり、桁行3間、梁行2間の東西棟掘立柱建物である。柱間寸法は桁行8尺等間、梁行9尺等間である。柱は全て抜き取られ、抜取穴の埋土中から9世紀中葉の土師器杯が出土している。

SK9153は大極殿基壇南側面の傾斜面に検出した直径50㎝の円形土壙である。埋土中には黒色炭化物が含まれ、底面からは土師器皿4点と鉄製紡錘車が出土した。土師器皿2枚を重ね、その上に蓋をするように1枚を置き、さらに鉄製紡錘車を重ねている。この土師器は10世紀後葉のものである。

遺　物

瓦類は完形に近い丸瓦、平瓦も多く、鬼瓦、熨斗瓦などの道具瓦もある。包含層から出土したものを含めると軒丸瓦は85点、軒平瓦は96点出土した。その内訳は軒丸瓦では6225A17点・6225C10点を含む6225型式が44点、6133型式7点、6311型式、藤原宮式各4点、6282型式3点、6296型式2点である。軒平瓦では、6663C型式44点を含む6663型式が63点、6641・6664型式が各6点、6691型式4点、藤原宮式3点、6801型式2点である。このように軒丸瓦6225型式が51.8％、軒平瓦6663型式が65.6％を占めて他型式を圧倒しており、この両者のセットが大極殿軒瓦の主体をなしていたことがわかる。

金属製品には10世紀後葉の土壙SK9153出土の鉄製紡錘車の他に、小石敷SX9145－B上面から出土した鉄製刀子がある。

土器は少なくSB9152および、SK9153出土の土師器に限られる。

埴輪は神明野古墳周濠埋土中から多く出土した。残存状態の良好な資料も少なくない。ほとんどが円筒埴輪であるが、蓋形埴輪も出土している。

まとめ

今回の調査の結果、大極殿ＳＢ9150の平面及び基壇の規模・型式が明らかになり、その下層に大規模な掘立柱建物の存在することが判明した。

大極殿ＳＢ9150の造営時期を出土した瓦を中心に検討してみる。先に記したように軒瓦6225－6663型式の組合せがＳＢ9150の造営に関わる所用瓦であったと考えられる。大極殿回廊東南隅と東朝集殿（第48次調査）の２ケ所で出土した瓦をみると、大極殿回廊では6225Ａ・6663Ｃ型式がそれぞれ60％を占め、東朝集殿地域では6225型式71.2％、6663型式88.6％である。両地区とも6225－6663型式の組合せが他型式を圧倒している。このことから、大極殿、回廊およびその南の朝堂院地区の造営は、一体となって実施されたことがわかる。6225・6663型式は平城宮第Ⅱ期（養老５～天平17）に位置付けられる。

『続日本紀』天平15年12月26日条に「初壊平城大極殿並歩廊。遷造於恭仁宮四年於茲。」という記事がある。恭仁宮大極殿については、昭和51年度の京都府教育委員会の発掘調査結果によると、桁行９間、梁行４間の四面庇付東西棟建物で、柱間寸法は身舎桁行17尺、梁行18尺、庇の出15尺である。これはＳＢ9150より大きく、天平12年に恭仁宮に運ばれた「平城大極殿」はＳＢ9150ではありえないことになるが、この問題は、大極殿基壇築成工事における前記の工程を一時期とみるか、二時期に分かれるかにも大きく係り、今後の検討に委ねたい。

大極殿の廃絶に際しては、建築部材をはじめ、礎石、基壇化粧石にいたるまで短期間に意図的に抜き取り、運び去っていることが、瓦片や凝灰岩片の埋没状態などから明らかになった。廃絶時期を示す遺物は皆無であるが、その廃棄状況から長岡遷都（延暦３年）または平安遷都（延暦13年）に関連するものと思われる。

下層遺構の大規模な掘立柱建物ＳＢ9140は大極殿と同一の中軸線上に建ち、柱間寸法も大極殿身舎と等しく、また、発掘区西端のＳＢ9141はＳＢ9140の西脇殿にふさわしい位置にある。いっぽう、すぐ北に隣接する地区は奈良時代当初から内裏的性格を維持していたことが従来の調査研究により解明され、そうとすればＳＢ9140は内裏の南に位置する公的空間の正殿と考えられる。